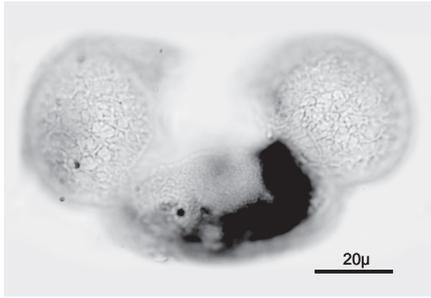
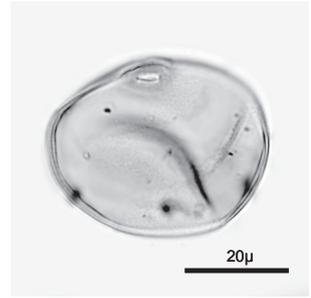
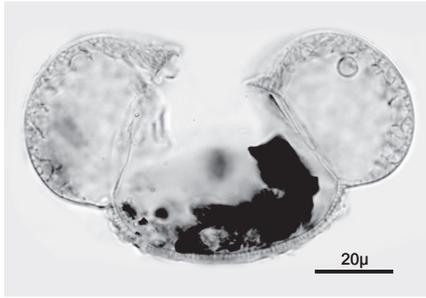


写真1 水城跡第64次調査の花粉化石(1)



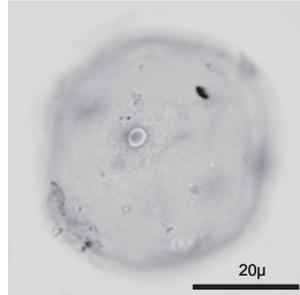
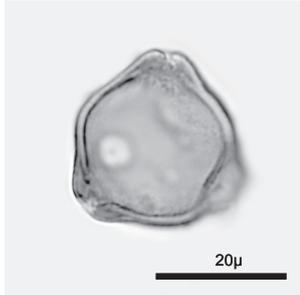
マツ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



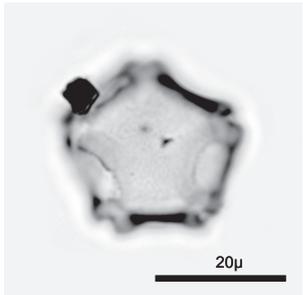
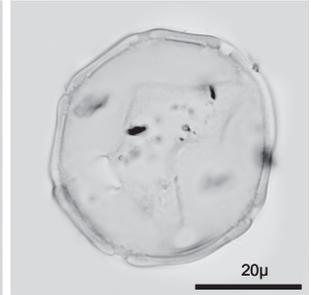
イネ科  
(5トレンチ試料 S6: 14層)



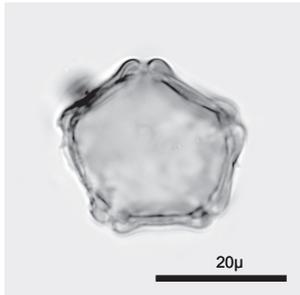
ヤマモモ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



クルミ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



ハンノキ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



コナラ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



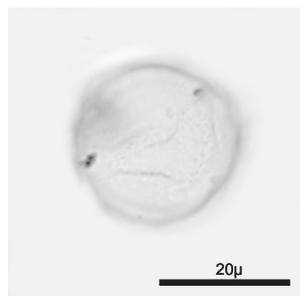
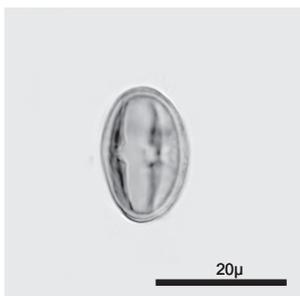
コナラ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



アカガシ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



シイノキ属-マテバシイ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



エノキ属-ムクノキ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

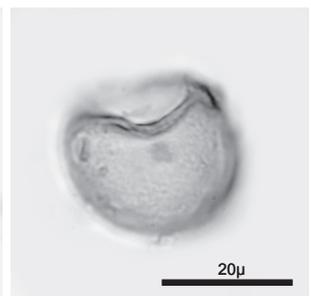
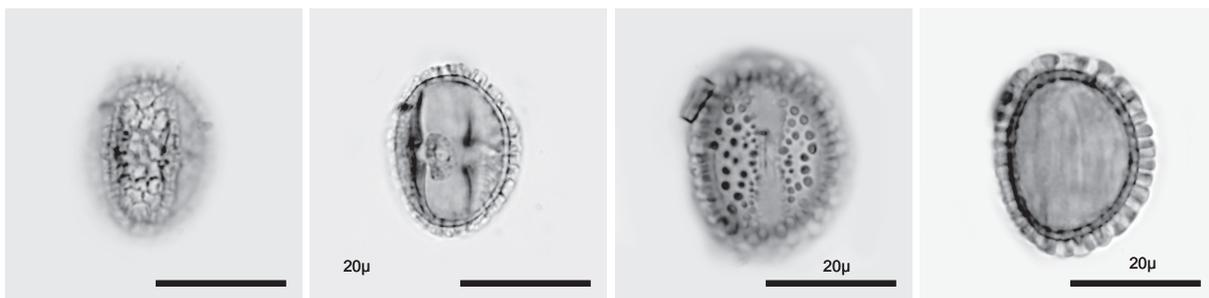
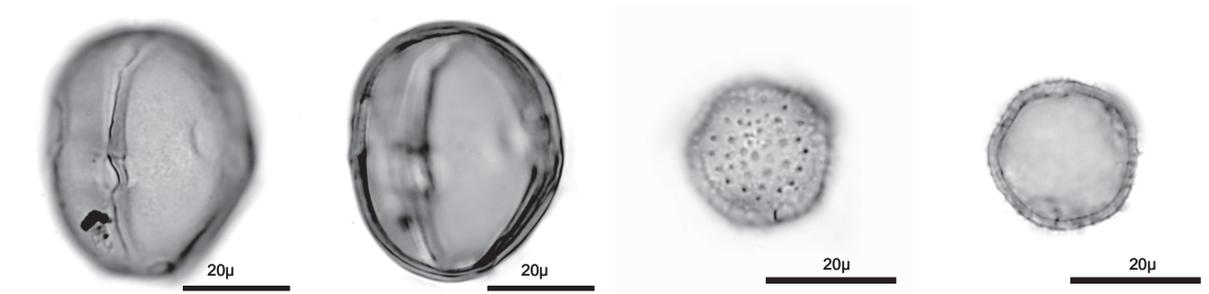


写真2 水城跡第64次調査の花粉化石(2)



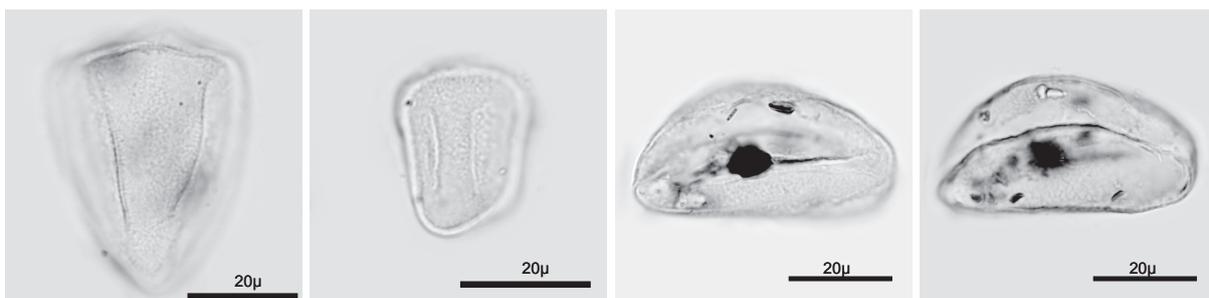
イヌザンショウ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

モチノキ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



カキノキ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

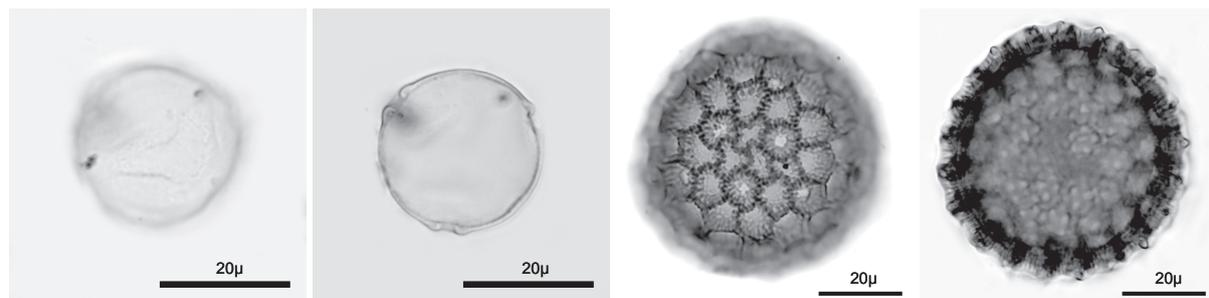
オモダカ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



カヤツリグサ科  
(5トレンチ試料 S6: 14層)

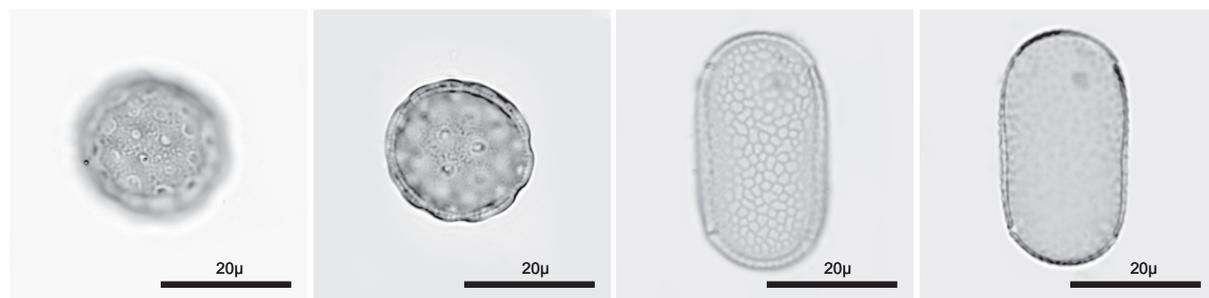
カヤツリグサ科  
(5トレンチ試料 S6: 14層)

ミズアオイ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)



クワ科 (5トレンチ試料 S6: 14層)

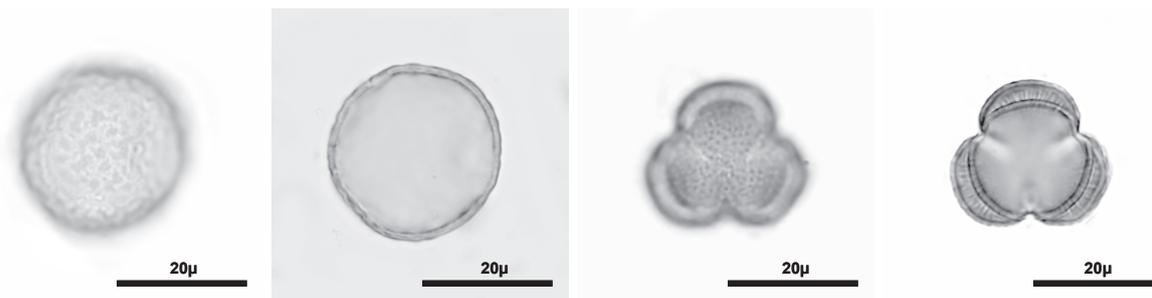
サナエタデ節-ウナギツカミ節 (5トレンチ試料 S6: 14層)



アカザ科-ヒユ科 (5トレンチ試料 S6: 14層)

ツリフネソウ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

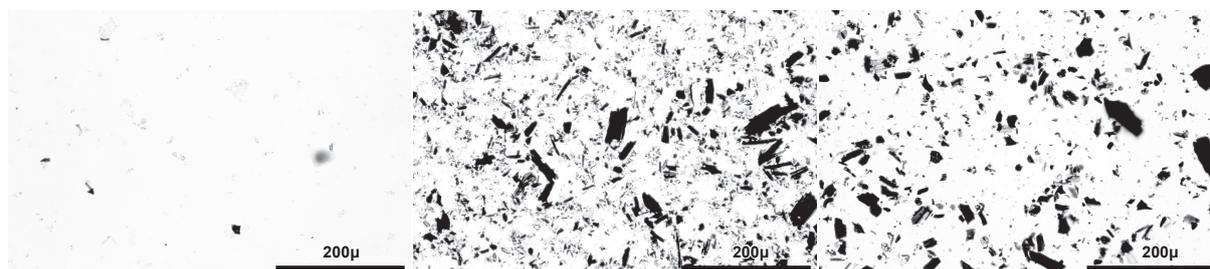
写真3 水城跡第64次調査の花粉化石(3)・プレパラート状況写真



オオバコ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

ヨモギ属 (5トレンチ試料 S6: 14層)

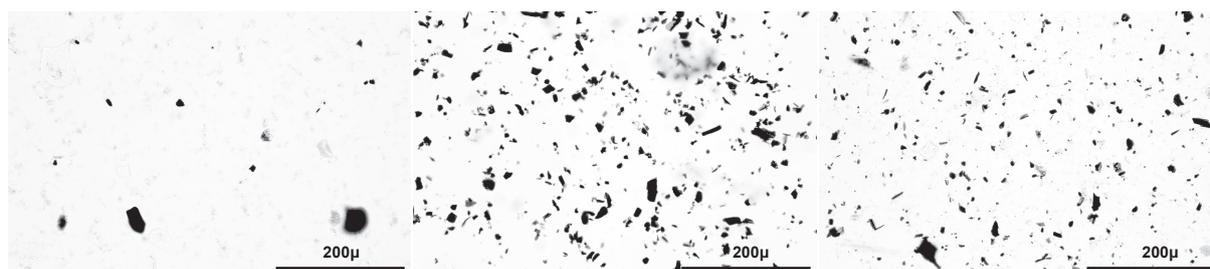
花粉化石が少なかった試料のプレパラート状況写真



1トレンチ試料 〇(基本層序⑦)

2トレンチ試料 S1(15層)

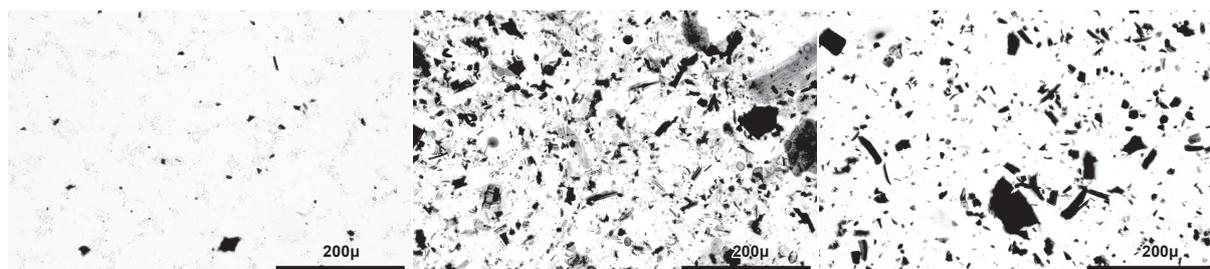
2トレンチ試料 S4(20層)



4トレンチ試料 S1-4層

4トレンチ試料 S4-7層

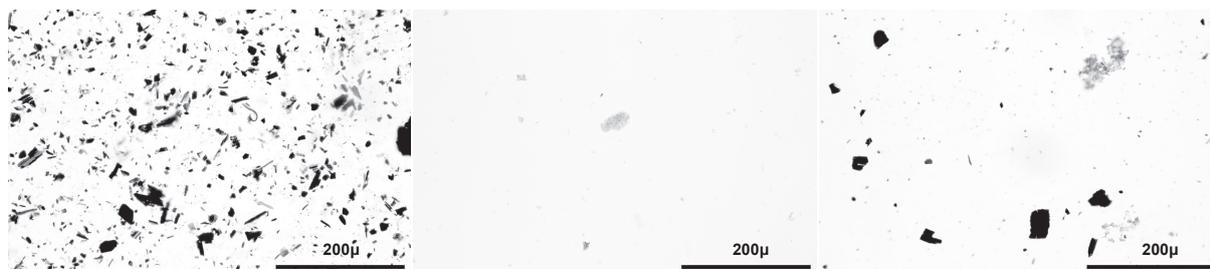
4トレンチ試料 S5-8層



4トレンチ試料 S6-15層

4トレンチ試料 S8-19層

5トレンチ試料 S3(6層)



5トレンチ試料 S5(13層)

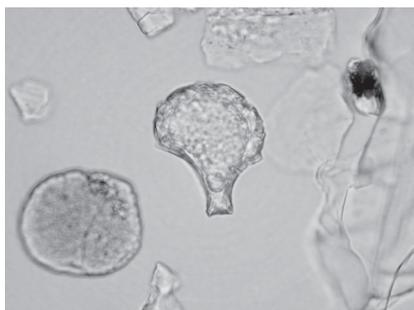
5トレンチ試料 S7(15層)

5トレンチ試料 S9(17層)

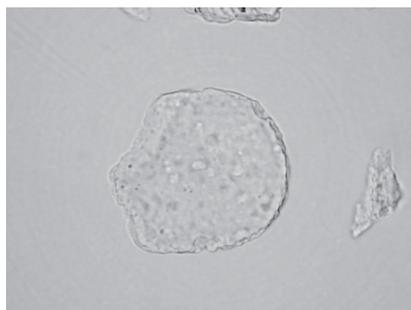
写真4 水城跡第64次調査の植物珪酸体化石（プラント・オパール）



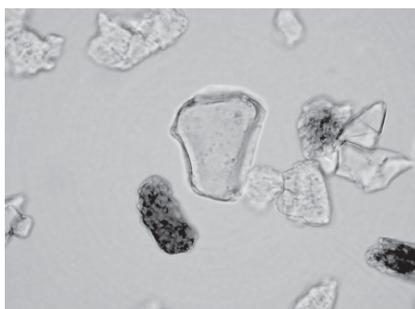
イネ (2トレンチ S4-20層)



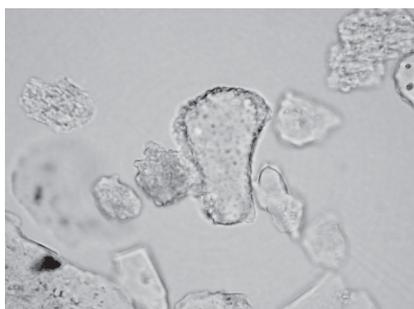
イネ (5トレンチ S5-13層)



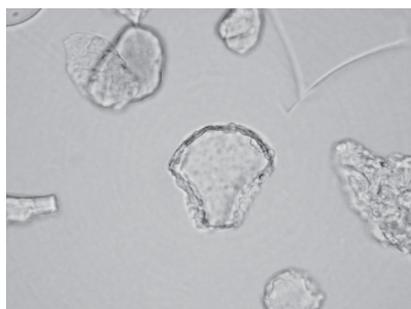
ヨシ属 (4トレンチ S5-8層)



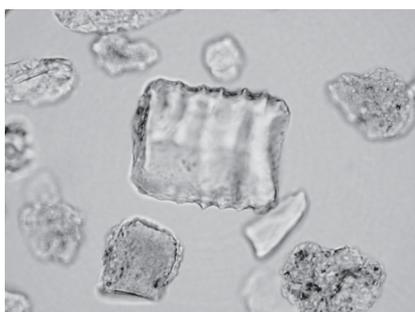
ススキ属型 (2トレンチ S1-15層)



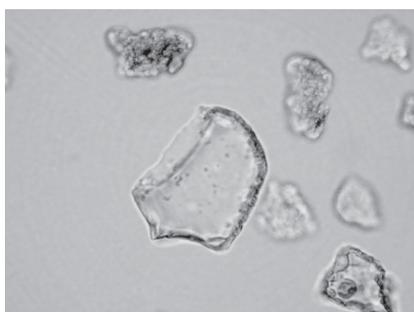
ウシクサ族型 (2トレンチ S1-15層)



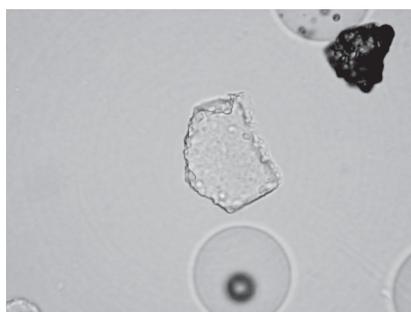
メダケ節型 (2トレンチ S1-15層)



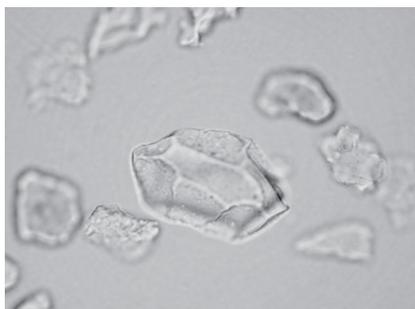
ネザサ節型 (5トレンチ S3-6層)



チマキザサ節型 (5トレンチ S5-13層)



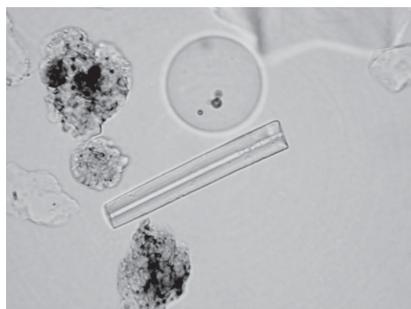
ミヤコザサ節型 (4トレンチ S8-19層)



ブナ科シイ属 (5トレンチ S6-14層)



マンサク科イヌノキ属 (5トレンチ S6-14層)

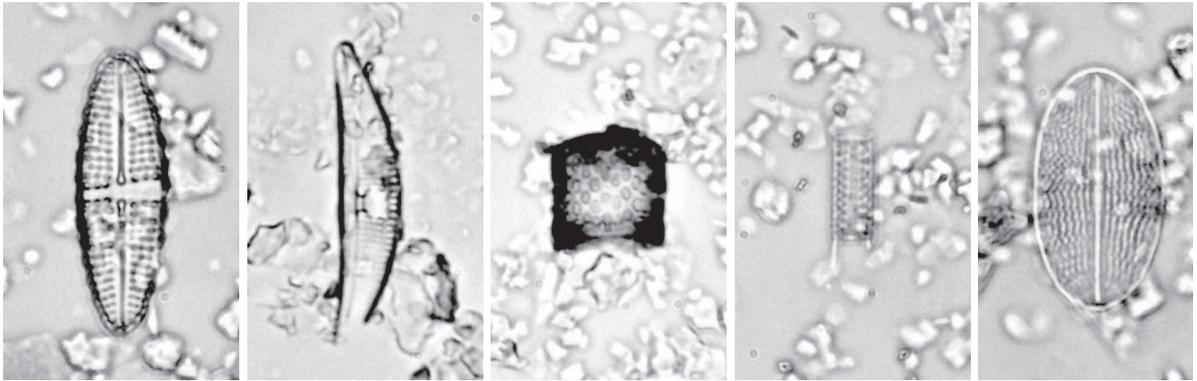


海綿骨針 (2トレンチ S1-15層)

— 50 μm

写真5 水城跡第64次調査の珪藻化石

5Tr S6 14層(外濠最初期堆積土)



1 *Achnanthes crenulata*

2 *Amphora copulata*

3 *Aulacoseira canadensis*

4 *Aulacoseira granulata* v. *angustissima*

5 *Cocconeis placentu*



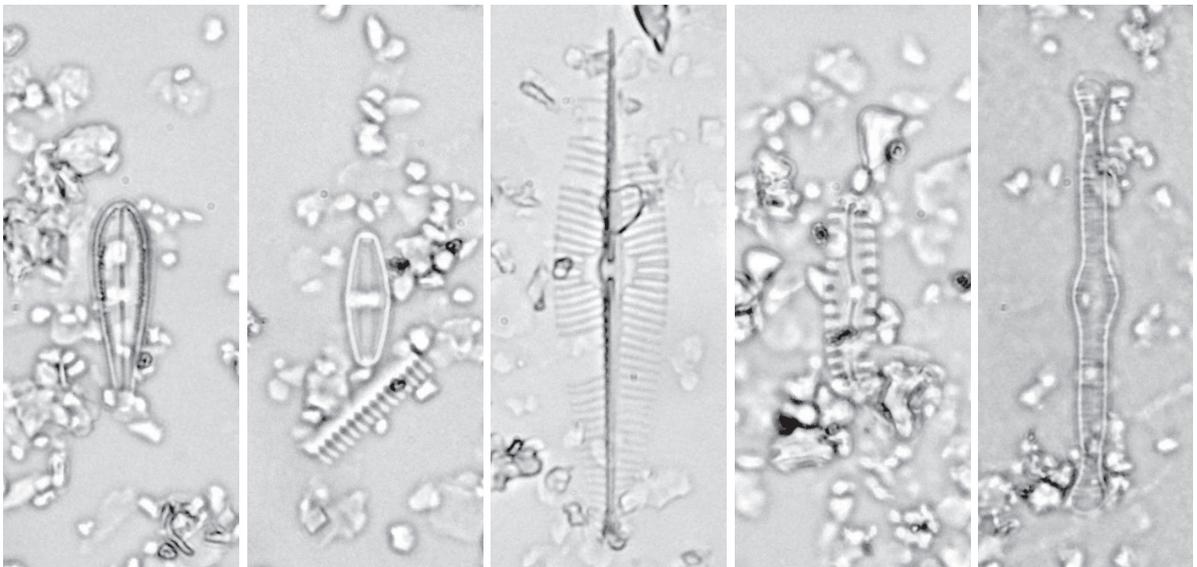
6 *Cocconeis neodiminuta*

7 *Cymbella silesiaca*

8 *Eunotia praerupta*

9 *Fragilaria construens* v. *venter*

10 *Gomphonema cleve*



11 *Gomphonema grovei*

12 *Navicula mutica*

13 *Navicula radiosa*

14 *Pinnularia borealis*

15 *Tabellaria fenestrata-flocculo*

— 10 μ

## V章 総括

### 1. 調査のまとめ

周辺における既往の調査成果についてはⅡ章で、各トレンチの詳細についてはⅢ章で述べた。ここでは、既往の調査成果も踏まえ欠堤部西側の様相について整理し、調査のまとめとしたい。以下、トレンチの状況について記述する際は、必要がない限り64次調査のトレンチのことを指す。

#### (1) 外濠

**【範囲】** 1・2トレンチでは全面で外濠を確認した。1トレンチ北端部は下成土塁裾から北側に61mの位置にあたるが、外濠北側の立ち上がりは確認されなかった。御笠川西岸から西に約70mの地点にあたる大野城市平成6年度調査地では、土塁裾から北に60m付近で外濠北側の立ち上がりがあると想定されるが、39次でも外濠北側の肩は確認されていない。39・64次調査地点では外濠がより北側に広がる可能性と、後世の改変により外濠の立ち上がりが消滅している可能性が考えられる。なお、39・64次調査地の北側には東西方向に平田川が流れ、御笠川に注ぎ込んでいる。これまでの試掘調査の結果からは、外濠と平田川の間は基本的に砂・粗砂層および粘土層で構成する。河川由来の堆積土と考えられ、現状では濠堆積土の可能性のある土層は確認されていないことから、水城築造当初は北側の肩も存在したと考えるのが自然であろう。

3・5トレンチでは下成土塁裾から北側に11～12m付近で外濠が北側に落ち込んでいく状況が確認でき、外濠南側肩と捉えることができる。この付近では立ち上がりは緩やかであるが、4トレンチ南側（下成土塁裾から北側に24m付近）で急激に落ち込んでいく。また、5トレンチ西側では、現在の御笠川西岸肩から西へ85m付近で、西側へ緩やかに落ち込んでいく状況を確認した。39次調査の所見も踏まえると、外濠南側の肩は5トレンチ中央付近から39次SX221へと北北東方向へと伸びていく状況が復元できる（第21図）。

濠底の標高は大野城市平成6年度調査で21.3～21.8m、1トレンチ南端部・中央部で21.0m、4トレンチ南端部で20.9m、5トレンチ西端部で20.8m、39次SX221で19.3～19.6mである。25次～1トレンチ間および1～4トレンチ間はずわかに東側に傾斜する程度であるが、4トレンチ～39次SX221間では急激に落ち込んでいることがわかる。ただし、39次SX221では流木の集積が確認されており流水の中心があったと想定されることから、築造当初の濠底は流水により削られた可能性も残る。また、現状の下成土塁肩から濠底までの比高差は、64次調査地点で4.2～4.5mである。

**【埋没過程の復元】** 大野城市平成6年度調査、39・64次ともに細かな差異はあるものの、外濠の堆積状況は良く似ており、3章で基本層序として提示したとおりである。

外濠の基盤層となるのは粗砂層（一部、粘質土）である。5トレンチ・39次では弥生中期～古墳時代初頭頃の土器が出土しており、水城築造前の洪水により形成した層と考えることができる。

最下層はグライ化した黒色粘土層が確認され、水城築造直後の滞水した状況も想定しうるが、現状では貯水のための堰などは確認されていない。自然科学分析の結果からは冠水状況ではなく、乾湿を繰り返すような湿地状の環境であったと想定される。なお、5トレンチでは基盤層と最下層との層界に顕著な凹凸が認められる。この痕跡が歩行痕であるならば、濠浚え等の維持管理をしていた可能性がある。

下層は流水に伴うシルト～砂層が形成し、1トレンチの遺物出土状況から8世紀前半以前には形成されたと考えられる。水城築造後さほど時間を経ずに流水の影響を受け堆積が進行してくる状況を復元できる。また、39・64次調査地では下層の上に広範囲で粘質土層が分布し、9世紀以降に形成した土層と考えられる。この粘質土層は均質であることや堆積状況を示さないことから人為的な埋め土の可能性もあるが、形成要因は不明である。自然科学分析の結果からは、周辺では草地領域が拡大した可能性が指摘され、特にイネ科の花粉が多いことから周囲で稲作が行われていた可能性がある。大野城市平成6年度調査、39次や2・5トレンチでは下層の上に粘質土・砂・シルトの互層があり、出土遺物から見て9・10世紀にかけては流滞水を繰り返す環境であったことがわかる。

上層は11世紀後半～12世紀前半を中心とした土器（一部、13世紀）を含む土層で、広範囲にわたり比較的均質に分布する。この段階をもって外濠はほぼ埋没したと考えられる。

近世以降は田として利用され昭和40年代前後には現在に連なる住宅地が形成される。なお、1トレンチの客土はマサ土であり、ややまとまった量の須恵器が出土した。須恵器に付着した土砂には焼土や炭化物が含まれており、牛頸窯跡群内の須恵器窯跡が存在する丘陵地で土取りしたマサ土を宅地の盛土として利用した可能性がある。

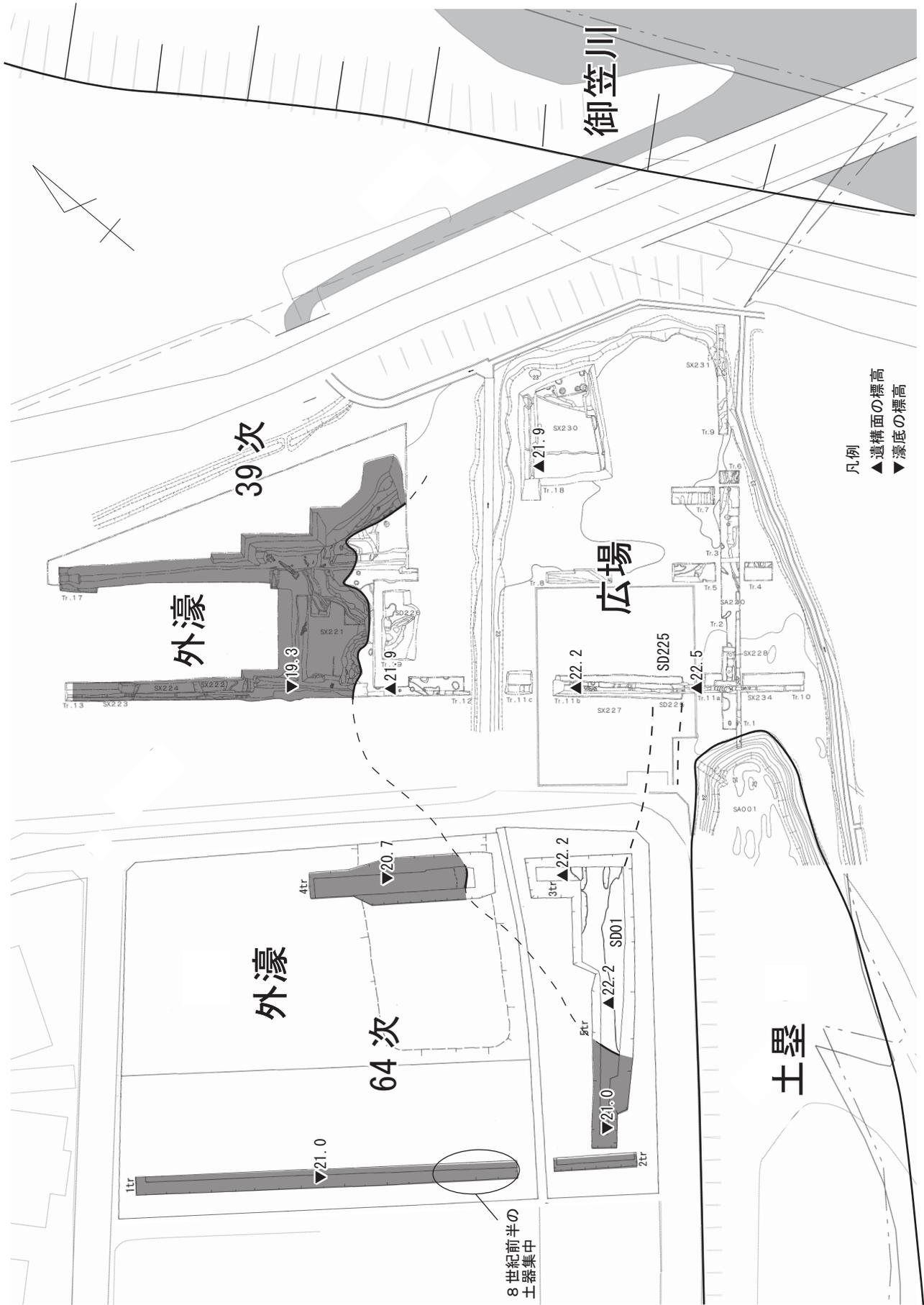
## (2) 平坦部

**【形成時期】** 1トレンチでは、8世紀前半の土器が貼り付くように出土した基本層序⑤に被覆されることから、8世紀前半以前に存在したことは間違いない。仮に水城築造当初は土塁際まで外濠があり、8世紀前半までの間に平坦部を形成したと仮定した場合でも、平坦部下で外濠堆積土由来の土層や外濠の痕跡がなくなるほどの大規模な改変は認められない。したがって、平坦部は水城築造当初から存在した可能性が極めて高い。39次調査では土塁積土直下に基本層序⑦の粗砂層があり、この部分の粗砂層中より古式土師器が出土しており、64次の調査所見と矛盾せず、平坦部の基盤層は水城築造以前の弥生時代～古墳時代の洪水により形成されたものと考えられる。

**【規模・形状】** 39・64次で確認された、外濠がない部分が平坦部となる。南北最大で35m、東西は現在の御笠川西岸から5トレンチ中央部で確認した西側への落ち込み肩で計測して約85mである。形状は不明瞭ながらもおおむね台形状を呈しているものと考えられる。上面の標高は全体的に22.2m前後で、ほぼ平坦である。39次調査では平坦部上に整地層があったことが指摘されているが、基本的には積土等は認められず水城築造時の基盤層を削り出すことにより形成したと考えられる。

**【平坦部上の遺構】** 3・5トレンチで溝状遺構SD01・02・03を確認した。SD01は土塁に平行する溝で、39次SD225と同一遺構になる可能性が高く、少なくとも総延長35m以上となる。底面の標高が東に向かって低くなることや土層の堆積状況のほか、流水の影響を受けやすい環境であることから、土塁裾の排水溝の機能が想定される。外濠の肩付近で土塁に向かって収束していく状況から、平坦部が顕在化している段階の所産と考えられる。平坦部の標高と外濠堆積土の標高の比較より、9～10世紀代に堆積した基本層序④層以前の可能性が高く、出土遺物から見ても水城築造後～8世紀の間に設置された溝とするのが妥当であろう。水城築造時に設置されたものかは明確ではない。

SD02・03は土塁に平行する小規模な溝である。両者は2mの位置に近接する同規模・同形状の遺構であることから、同様の機能を有した遺構の可能性が高い。調査時には、布掘り建物の可能性も想定して調査を行ったが、柱穴等は確認されず、床面の標高も異なることから、現状では建物の



第21図 調査成果概念図 (1/600)

可能性は低い。時期はSD01と平行することや出土遺物から8世紀以前と考えられる。

出土遺物として注目されるのが羽口である。平坦部の遺構面にめり込むように出土したほか、SD02からも出土したことから、8世紀以前の可能性が高い。鍛冶炉は確認されていないが、8世紀以前に小規模な鍛冶をしていたことを示す。このほか、欠堤部周辺では取瓶・鋳型（もしくは埴塙）・炉壁・鉄滓などが出土しており、金属器加工を行っていたことを示す。

以上のように、39・64次で確認した平坦部は、水城築造時に形成された可能性が高いこと、生産活動を含む人々の営みがあったことから、意味のある空間と捉え「広場」という表現を用いることとする。

## 2. 特殊遺物と建物の分布からみた古代水城の土地利用と欠堤部周辺の性格

64次調査では調査範囲が狭いにも関わらず、比較的多くの遺物が出土した。特に1・2トレンチの外濠堆積土中では、須恵器食器類のほか土師器調理具や転用硯の可能性のある須恵器など特徴的な遺物を含む。また、3・5トレンチでは羽口が出土しており、当該地における金属器加工の可能性を示す。ここでは、奈良時代の水城出土遺物を対象に硯・墨書土器・製塩土器・金属器生産関連遺物などの特殊遺物のほか、鬼瓦や土師器調理具の分布に注目する。さらに建物の分布も併せて整理することにより欠堤部周辺の性格について推測する手がかりとする。

### (1) 特殊遺物と建物の分布（第22図）

【硯】 東門周辺の5・10・24次調査地、西門周辺の26・33・40次調査、欠堤部周辺の2・6次調査地に分布する。64次調査地では、転用硯の可能性のある須恵器がある。

【墨書土器】 奈良時代に属するものは、東門周辺の10次調査で出土した「水城」銘墨書土器と西門周辺の26次調査で出土した事例のみである。

【製塩土器】 東門周辺の10・24次調査、東門西南部の27次、欠堤部東側の2・4次、西門周辺の33次に分布する。

【金属器生産関連遺物】 東門周辺の5・10次、欠堤部東南の6次、欠堤部西側の39次、西門周辺の26・33次に分布する。64次調査地でも羽口が確認された。

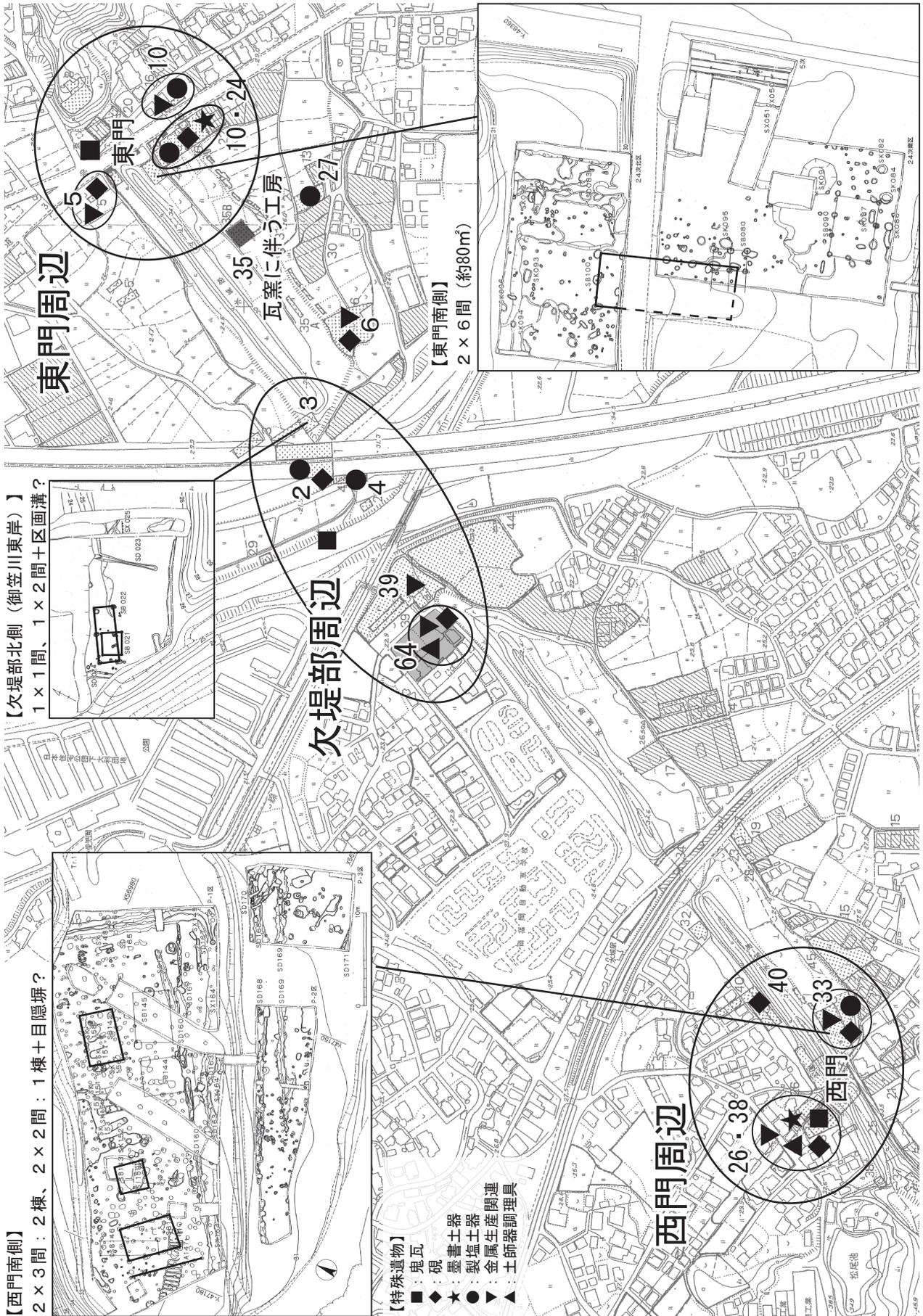
【鬼瓦】 西門周辺の26・38次調査、伝東門出土例のほか、欠堤部に近接した御笠川河床で採集された資料がある。

【土師器調理具】 あくまで報告書に掲載された資料からの判断であるが、全体の出土遺物に対して土師器調理具の出土量は極めて少ない。64次以外では西門周辺の26次のみで確認されている。

【建物】 東門南側では、2×6間（約80㎡）の大型建物が確認されているほか、建物の構造が不明であるものの礎石が見つまっている。西門南側の下成土塁上では2×3間の建物2棟と2×2間の建物1棟および目隠し塀の可能性が指摘される柵列がある。このほか、欠堤部東側では御笠川に面した下成土塁上で1×1間、1×2間の小規模な建物が確認されている。2棟は重複関係にあり、同時並存ではない。

### (2) 欠堤部周辺の性格について

以上の整理により、改めて東門・西門の周辺に特殊遺物が集中することが確認できた。いずれも門の南側に建物があり、硯・金属生産関連遺物を伴うことから、官人あるいは門を守る兵士が存在



第22図 水城跡における特殊遺物・建物分布図

し、門の往来の監視や文書処理のほか、小規模な金属器加工等を行っていたと想定される。こうした東西門周辺と同様の傾向を示すのが欠堤部周辺の様相である。硯・金属生産関連遺物・製塩土器が分布し、欠堤部東側では奈良時代と推測される掘立柱建物がある。また、御笠川河床で採集された鬼瓦の存在は、欠堤部付近に何らかの構造物があったことを示す。

ここで注目されるのが、土師器調理具の存在である。水城跡における奈良時代以前の土師器調理具は西門周辺で少量出土している程度であるが、64次調査では調査面積が狭いにも関わらず土師器甕・甑が出土した。煤・焦げが付着し、器面は磨耗していないことから、調査地付近で炊飯行為があったことは間違いない。このことは欠堤部周辺に人が滞在していたこと、少なくとも調理・食事が必要な程度に人が滞在していたことを示す。欠堤部が開口していたと考えられることや「防衛」という視点からは、兵士が滞在したことも十分に想定しうる。「養老衛禁律24越垣及城条」によると、築地や城壁をみだりに越えることを厳しく禁じており、「養老軍防令52辺城門条」と同条の義解によると、筑紫の城（水城・大野城・基肆城・鞠智城など）の門は、日中のみ開いていて、原則として夜間は閉じられていたと考えられている（酒井、2009）。これに対し欠堤部は遮蔽施設が存在しないため、昼夜を問わずオープンな状態であり、このことから欠堤部周辺の往来を守衛・監視する兵士が不在であるとは考えがたい。したがって、欠堤部西側に広がる「広場」の機能の一つとして、兵士等が滞在する場所であったという仮説が提示できる。

なお、平安時代～鎌倉時代に詠まれた歌に、水城と御笠川の関係を物語るものがあり、少なくとも中世においては舟で水城を通過することがあったことを示す。物的な証拠はないが、欠堤部西側「広場」の機能の一つに「水運」との関わり、つまり物資の荷揚げや人が上陸するための川港的な場所という可能性も視野に入れておく必要がある。

### 3. 今後の課題

今回の調査により、御笠川に面した地点に水城築造当時から「広場」が存在する蓋然性が高まった。ただ、形成時期については、土層の状況や土器の出土状況から積み上げた解釈であり、今後は土塁積土との関係性を明らかにする必要がある。広場の規模・形状はある程度把握でき、その機能についても「防衛」と「水運」という観点から仮説を提示した。しかしながら、平坦部上の施設については未確認であり、いずれ面的な調査を実施することにより解決されるものと考えている。御笠川河床も視野に入れた調査を実施していく必要がある。外濠については、既往の調査成果を含め埋没過程・埋没環境を復元できる資料を得た。貯水のための堰などの施設は未確認であり、引き続き問題意識を持ちながら調査を継続する必要がある。北側の立ち上がりについても確認できていない。また、濠の埋没初期の段階で濠浚えをしている可能性があることや、9・10世紀代においても維持管理をしていたという可能性が提示でき、少なくとも12世紀頃には濠は埋没したことが明確となったが、誰が・いつまで・どのように維持管理をしていたのかについては不明な点が多い。

以上のように、64次調査の結果、当初の目的の一部については解決できた。一方で、新たな課題も見えてきた。引き続き調査研究を進め、水城跡の実態解明を進めていく必要がある。

【参考文献】大野城市教育委員会1996『水城跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第43集）／九州歴史資料館2009『水城跡』／酒井芳司2009「(4) 文献資料からみた古代の水城」『水城跡』（下巻）／太宰府市教育委員会1994『水城跡』（太宰府市文化財調査報告書第24集）

# 圖 版